

## 次回のご案内

## 第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会

開催日：2021年12月16日(木)、12月17日(金)

会場：朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター

テーマ：肝類洞壁細胞のエコシステム

当番世話人：寺井 崇二

新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器内科学分野 教授

〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757

電話：025-227-2207 FAX：025-227-0776



## ご挨拶

第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会

当番世話人

新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器内科学分野

教授 寺井 崇二

この度、第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会を2021年12月16日(木)、17日(金)の二日間に渡り、朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)に於いて開催させて頂くこととなりました。歴史ある本研究会の世話人をさせていただきますこと大変光栄に存じます。

肝類洞壁細胞にフォーカスし、最新の研究内容について議論してきた本研究会ですが、新潟では1998年以来、2度目の開催となります。今回は『肝類洞壁細胞のエコシステム』をテーマに掲げまして、皆様からの数多くの演題応募をお待ち申し上げております。特別講演では、基礎医学における各分野のパイオニアの先生方から、知っておきたい最新の知見・技術をご紹介いただくとともに、ヨハネスゲーテンベルク大学より肝線維化のスペシャリストであるDetlef Schuppan教授を招聘致します。

本分野の研究に新たな視点・手法を取り入れる機会としてご活用頂けましたら幸いです。また、基礎医学のみならず臨床を意識した Translational research まで幅広い演題を募集致します。近年の肝疾患領域におけるDAAや免疫チェックポイント阻害薬などに並ぶ、新たな治療法の確立につながるような研究成果の発表も期待しております。

さらに、若手にフォーカスしたU-35セッションを設け、次世代を担う研究者の育成にも注力して参りたいと考えています。若手の先生には本研究会を足掛かりに、国内のみならず世界へと羽ばたいて頂きたいと願っております。

SINUSOID  
NEWS

Vol.19

肝類洞壁細胞研究会

2021.4

## 特集

## 第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会

久留米大学医学部内科学講座消化器内科部門 教授 鳥村拓司  
「COVID-19禍での第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会を終えて」

大阪市立大学大学院医学研究科機能細胞形態学 助教 宇留島隼人  
「第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して」

久留米大学内科学講座消化器内科部門 助教 岩本英希  
「第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して」

東海大学医学部先端医療科学 助教 柳川享世  
「第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会オンライン参加顛末記」

Information

イベント情報

「APASL Single Topic Conference 2021 Osaka」





## COVID-19禍での第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会を終えて

第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会 当番世話人

久留米大学医学部内科学講座消化器内科部門

教授 鳥村 拓司

まったく迷惑なウイルスが流行したおかげで、2020年は国内外の学会や研究会に出かけることができず、うつうつとした日々を過ごされた先生方も多いことと思います。かくいう私もその一人で、2020年に飛行機に乗ったのは2月のソウル、6月の東京、11月の金沢だけで、まったくマイルの貯まらない1年でした。このため年末のこの研究会だけは何としても「on site」で開催したいという思いがありました。また、残念ながらCOVID-19の感染を避けるため今回は参加を断念されましたが、この会の創始者のひとりである谷川久一先生も、皆さんにお会いできることを大変楽しみにされていました。

2年前に河田則文代表世話人から第34回の研究会をお世話するよう指名された時真っ先に決めたことは、この研究会が始まった「翠香園ホテル」で開催することと、会で発表された研究の歴史を若い先生たちに紹介するセッションを設けることでした。従って、研究会のテーマは、昔の研究を振り返って今後の研究のヒントとできることを願い「類洞壁研究の今昔物語」としました。また、本研究会で発表された研究の歴史を紹介する事に関しては2日目に市田隆文先生の名司会のもと、有井滋樹先生、野口和典先生、河田則文先生から、「今だから話せる」といった秘話も飛び出し大変盛り上がった鼎談「類洞壁細胞研究の今日までの道のり-王道もあれば寄り道もある」で成就されました。特別講演に関しては、類洞壁細胞の研究とは、形態学の立場から肝臓の微小環境を研究するものですので、近年免疫チェックポイント阻害剤+血管新生抑制療法が導入され肝細胞癌でも注目されてきている、リンパ球浸潤と血管の関係を長年研究されてきた大阪大学微生物病研究所 情報伝達分野教授の高倉伸幸先生にお願いしました。講演内容

は期待以上のもので、腫瘍組織への免疫関連細胞の浸潤と腫瘍血管構築の関係について非常に高レベルなお話を拝聴することができました。先生のお話は、今後我々の肝細胞癌の微小環境研究に役立つものと確信しています。

今回は幸運にも開催が緊急事態宣言の発出される直前であったことから、何とか「on site」と一部Webで開催でき、懇親会も非公式で人数を制限してではありましたが行え、何とか研究会本来の姿を形作ることができたのではないかと自負しています。参加人数は47名、発表演題数は21題でした。この参加人数、演題数が**たかだか**なのか、この時期にしては**なかなか**なのかの判断は人それぞれかとは思いますが、お世話した本人としては、大変満足いく研究会でした。でも本当に満足できたのは、参加者がその後COVID-19を発症したという話を聞かなかったことかもしれません。

第35回の研究会は寺井崇二先生が新潟で開催されます。その時には多くの先生方が「on site」で集まれることを期待しています。

最後に、この研究会のディレクターを務めてくれた当科の中村徹先生以下スタッフの方々の努力に深謝いたします。



会長の鳥村先生、事務局長の中村徹先生、増田先生と久留米大学消化器内科医局秘書方々

## 第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して

大阪市立大学大学院医学研究科 機能細胞形態学

助教 宇留島 隼人

やはり対面で行われる学会は良い!と言うのが私の第34回学術集会に参加した率直な感想です。オンライン学会とは脳への刺激が違いました。現場の厳粛な空気感がそのように感じさせるのでしょうか。日常環境で直前まで他の仕事をして参加するリモート学会とは明らかに違いました。もちろん、このような状況ですから、リモート開催は時期・開催地・予想される参加人数などによっては尊重されるべき判断であることも理解しております。ただ、ほぼ全ての学会がリモート、学生への授業もリモート、友達との飲み会までもリモート…な2020年の最後にして、本当に久しぶりに対面式学会に参加できたこと、さらにその学会が毎年発表させていただいている本会であったことがとても嬉しかったです。私は前年度の第33回学術集件事務局を担当させていただきまされたので、直前になってのスケジュールの再調整がいかに大変であるかを少しはわかっているつもりです。日々のコロナ関連ニュースを耳にする度に「今年担当の先生方は大変やなぁ…(去年で良かった…)」と何度も思いました。きっと色々なご意見が飛び交い最後の最後まで決断が難しい準備期間であったと推察いたします。会場では極力会話を控えていたためご挨拶させていただくことが出来ませんでした。鳥村先生はじめ久留米大学スタッフのご英断とご尽力にこの場をお借りして御礼申し上げます。

数々の素晴らしいご発表に加え、私が一番印象に残っているのは市田先生の御司会で有井先生、野口先生、河田先生が肝類洞壁細胞研究会の歴史を振り返られた「鼎談」です。始まりの地である久留米での大会にふさわしい企画でした。写真での回想中に出てこられたのが名だたる先生ばかりだったのですが、当然のことながら本研究会初期の写真の中では今の私くらいの年齢と思われるお姿。「すごい先生方は、今の自分くらいの年齢から、

いや、もっと若い頃から既にすごいやなぁ」と尊敬、憧れ、焦り、諦め、など色々な感情が湧き上がったのを覚えています。私も肝類洞壁細胞研究者として、この紡がれていく歴史に少しでも貢献するぞ!と改めて心に決めました。

私事で恐縮ですが、久留米大会は、教員人生初めて研究指導を担当した修士学生が、これまた人生初の口頭発表に挑ませていただく機会となりました。ぱっちり早起きして気合いを入れて二人で大阪を飛んだのですが、新幹線でPC画面を見ながら発表練習をし過ぎたせいで学生が乗り物酔いになってしまい何度もトイレで吐くという事態に…。さらに発表を控えた2日目の朝、緊張がピークの学生はほとんど食事を口にせず言葉も発さず顔色も悪かったので、どうなることかと心配していたのですがなんとか無事に発表を終えました。これから何年も回を重ねるのであろうこの肝類洞壁細胞研究会学術集会であります。私も学生もきっとこの第34回の記憶が鮮明に残っていくことと思います。

最後に、このSinusoid Newsをご覧になられている肝類洞壁細胞研究会会員の中にも新型コロナウイルス感染症治療に従事されている医師の方々が多くいらっしゃると思います。会員同志である皆様の御健康を心よりお祈り申し上げます。



「鼎談のようす」



## 第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して

久留米大学内科学講座消化器内科部門

助教 岩本 英希

第34回、肝類洞壁細胞研究会に参加させて頂きました久留米大学消化器内科に所属します岩本英希と申します。

今回の研究会は特別な会となりました。

コロナ禍で、他の沢山の学会や研究会はWebで行われる中、本会は現地開催にこだわるという事で、本会会長であります鳥村拓司先生の学術に対する意地、気合を感じました。鳥村先生は、私の基礎研究分野の直接の師匠であり、鳥村先生の研究分野をそのまま受け継ぎ、癌の血管新生の研究を微力ながら、私も行っております。

COVID-19の蔓延は世界の人々から日常を奪ってしまいました。当たり前前にできていたことが、実は当たり前では無かったと気づかされました。研究会で発表する事、研究内容についてみんなでDiscussionする事、一つ一つの事が当たり前では無かったのです。そんな中で、学問だけはCOVID-19に負けないというそんな意地みたいなものを、私の師匠から感じた訳で、もちろん感染が広まらない様に対策するのは当然、Webでの開催ももちろん推奨されるべきでしょうけど、こういう形で現地開催。これも本当に良いものだと感じました。Webだとどうしても一方通行になってしまうので、その場で、熱い質問、議論が交わせる事は学問の発展・研究の発展にとっても大切なのだと痛感致しました。

現地参加された先生が38名だったそうです。各県から、COVID-19の事もあついで、これだけの人数の先生方が集まるこの肝類洞壁細胞研究会は、本当に熱い研究会だと思いました。発表された演題21題、どの演題も深く研究された内容で、非

常に勉強になりました。

また、今回、久留米で開催されましたが、1987年に第一回目の肝類洞壁細胞研究会がこの久留米の地で開催された事を知ると、この研究会の歴史の深さを感じました。私が所属します久留米大学消化器内科からは、3演題の発表が為されましたが、もっと数多くの質の高い研究が発表できるように、私自身も努力し、研究室の仲間ももっと活き活きと研究が進むようにサポートしていきたいと思った次第であります。

今回、私の後輩二人が発表しました。肝細胞癌に対する分子標的治療薬における腫瘍免疫細胞の変化を評価したのが鈴木浩之先生で、NASH-肝硬変症モデルマウスにおけるCD34陽性細胞移植の効果を検証したのが増田篤高先生でした。二人とも、とても研究熱心で、たまにDiscussionが面倒くさくなるくらいです。これから久留米大学消化器内科の基礎研究分野をもっと発展させていくための心強いメンバーです。

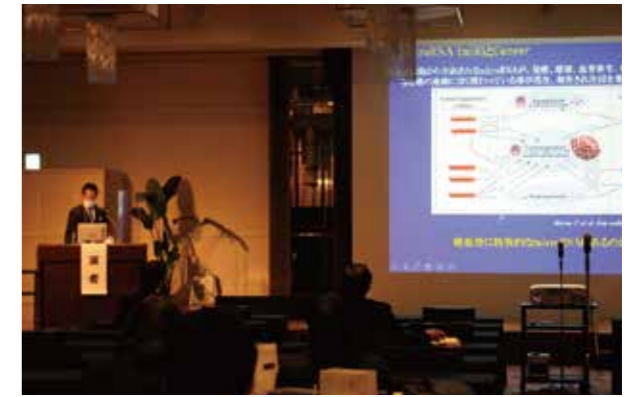
私自身は、鳥村先生と古賀浩徳先生及びエーザイ株式会社さまのお陰で、スイーツセミナーで発表させていただく機会を頂きました。スイーツの足しにもならない粗末な発表だったかもしれませんが、私としましては、とても緊張した発表でしたが、とても良い経験が得られた発表となりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

私が個人的に、非常に興味を持った発表は、やはり特別講演の大阪大学微生物研究所、情報伝達分野の高倉伸幸先生のご講演でした。高倉先生は、日本の血管新生研究の第一人者でありまして、私が研究に行き詰った時に血管新生の本を読むと、大

体、高倉先生が書かれた教科書でありまして、今回、そのような先生からの最新の血管新生の話題を聞いたことはとても嬉しかったです。癌血管幹細胞など、まだまだ癌血管新生の分野には未開拓の領域があるんだと知れて、これからも研鑽を積んでいこうと思いました。

末筆ではございますが、このような執筆の機会を与えて下さいました肝類洞壁細胞研究会事務局の方々に心より感謝申し上げます。また、本会の開催にあたりご尽力頂いた医局秘書の方々にも御礼申し上げます。

皆様及び皆様のご家族様方が、COVID-19の感染無く、益々のご健勝とご発展されることをお祈り申し上げます。



## 第34回肝類洞壁細胞研究会学術集会オンライン参加顛末記

東海大学医学部 先端医療科学

助教 柳川 享世

第2波が収束しきらないうちに第3波が始まってしまった。2020年11月に入って、日本全国の新型コロナウイルス感染症の陽性判明者数が1,000人を超えたあたりで久留米へ出張できるか雲行きが怪しくなり始めました。2020年は、それまでの学会が全てオンライン参加となり研究室と自宅を往復するだけの1年でしたので、久しぶりの県外出張を密かに楽しみにしていました。久留米への航空チケットは第2波の前、6月に早々と購入していました。その当時は、夏～秋頃に第2波が来て、12月は感染が少しは落ち着いているのではないかと予想・期待していましたが、現実には皆様の知る通りです。11月の3週目には1日の感染判明数が2,000人を超え、何とか(医療資源的にも)感染

が収まってくれないかと毎日願っていましたし、自分は感染しない・させないようにと気を配って日々を過ごしました。

久留米の地で参加するかは、本当に直前まで迷っていました。所属のキャンパスには病院を併設しており、万が一にも職員として感染してウイルスを持ち込んでしまったら、という心配と、深刻になりつつあった神奈川県での感染状況、それを考慮した大学から出張自粛が通達されるのではないかとという予測。毎日学会のポスターを眺めながら夕飯の下調べもしっかりして、おいしそうなどん屋さんや魚が食べられるお店に目星も付けていたのですが、しかしきつと何より、会頭である鳥村先生がお悩みになっておられたと拝察いたします。



結局は12月に入っても感染者数の増加は収まる  
気配がなく、1週間前になりオンライン参加に  
することを決めました。それからは慌ただしく、航空  
チケットのキャンセルをしたり学内の手続きをし  
たり、音声付きの発表スライドを作成していったわ  
けですが、7分の発表に1時間近くかけて何度も録  
り直しました。録音の最後に、7分ぴったりに収ま  
った瞬間は達成感がありました。当日は質疑応答  
で日野先生から幾つも質問を頂けて、臨床の視点  
から今後の参考になりました。視聴できるのが自  
分のセッションだけということを知り、学術  
集会1日目は通常業務となりました。今頃有名なう  
どん店で食べていたはずが…。他の発表や鼎談が  
どうなったのか、何らかの形で知ることが出来れ  
ばとても嬉しく思う今日この頃です。

2枚の写真は、キャンパス周辺です。1枚目は、  
まさに発表当日の朝、何か現況を撮っておこうとた  
またまカメラを大山(おおやま)へ向けていた時の  
写真です。朝一番に飛び立ったドクターヘリが帰還  
したところでした。新型コロナウイルス感染症に関  
係なく、年末はドクターヘリが毎日出動していまし  
た。2枚目は数年前の写真ですが、大山の中腹にあ  
る大山阿夫利神社からの夜景です。晴れていると  
江ノ島、相模湾の先に三浦半島も見えます。結局昨  
年は、緑豊かな伊勢原の地で1年間を模範的に過  
ごしました。2021年が始まって2か月近く経つ今  
も継続しています。この感染症が収束した年には、  
是非、肝類洞壁細胞研究会発祥の地でまた開催し  
ていただけたらと願っております。



東海大学伊勢原キャンパスから望む大山、  
向こう側に富士山が位置する



大山から相模湾を望む。  
矢印の先が東海大学伊勢原キャンパス




Information

イベント情報

APASL Single Topic Conference 2021 Osaka

◆ Conference Overview

Date	September 2 (Thursday) - 3 (Friday), 2021	
President		Norifumi Kawada, M.D., Ph.D. Professor, Department of Hepatology, Graduate School of Medicine, Osaka City University
Theme	Molecular and Cell Biology of the Liver: Recent Evolution to Clinical Application	
City	Osaka Japan	
Venue	Hilton Osaka	

◆ Program at a Glance

Categories

1. Molecular Basis of Hepatitis B/C Virus Infection and Therapy
2. Genetic and Epigenetic Regulation of Liver Diseases
3. Molecular Basis of Liver Fibrosis and Cirrhosis Therapy
4. Gut-Liver-Brain Axis in Hepatic Pathophysiology and Clinical Medicine
5. Molecular Basis of Alcoholic and Nonalcoholic Steatohepatitis and Therapy
6. Immunology, Inflammation and Regeneration in Hepato-Biliary Diseases
7. Use of Pluripotent Stem Cells and Reprogrammed Cells for Therapy
8. Diagnosis and Therapy on Hepatic and Biliary Cancer

Educational Sessions

Acute on Chronic Liver Failure  
COVID-19 Infection and Liver Diseases

◆ Important Dates

Abstract Submission Deadline	May 31, 2021
Early Bird Registration Deadline	July 31, 2021
Pre-Registration Close	August 31, 2021

